67

広島から始まった黒川家十二代の軌跡

黒川　達郎
大分丘の上病院

大分県竹田市にある黒川家は当地で古くから続く医家として知られる．そのルーツを辿ると先祖は広島藩福島正則の重臣井川助兵衛（520石）に始まる．しかし1619年水害による城の損害を無届けで修理したと徳川幕府に咎められ，広島藩はお取り潰しとなり，井川氏は浪人となった．

井川氏は遠く九州豊後の岡藩を頼り，槍術指南役として迎えられた．その詳しい経緯・年代は不明である．

こうして岡藩士となった井川氏の二代目次兵衛の三男周益が母方の姓である黒川を名乗り，初代黒川氏となった．

初代黒川周益は藩の先輩医師姥柳周雪に師事し，長崎で蘭医（商館医）にも学んで，岡藩4代藩主中川久恒公に雇われ，藩出身者として初めて江戸上屋敷の外科医に抜擢された．元禄14年には御手医師並四人扶持の待遇を受け，元文4年に亡くなったが，この周益以降黒川家は代々藩医として受け継がれることになった．

2代黒川元雪は元文4年に家督を継ぎ，4人扶持御手医師となり，在勤24年で寛延3年に隠居し，宝暦3年に亡くなった．

3代黒川玄益は寛延3年に家督を継ぎ，4人扶持御手医師となり，在勤20年で明和3年に亡くなった．

4代黒川良益は明和4年に家督を継ぎ，4人扶持小普請入の待遇を受け，寛政元年に亡くなった．

5代黒川三折は寛政2年に家督を継ぎ，4人扶持小普請入の待遇を受け，寛政3年御手医師並になり，寛政6年に亡くなった．

6代黒川周怡は朽網庄屋大塚弥助の男子で，養子として黒川家に入った．寛政6年家督を継ぎ，文化3年御匙医師並になり，在勤16年で文化6年に亡くなった．この周怡の在任中に幕府直轄の住人吉兵衛が伊勢の久吉に刀傷を受け，周怡は適切な治療を行ったが，幕府の取調べを受けることになった．江戸の寺社奉行で当事者とともに周怡も取調べを受けたが，幸い咎めはなかった．このとき周怡は苦労して桂川甫周に面会している．周怡は一代御手医師となり，御匙医師並に任命され内科・薬科・外科を統括する藩医として信頼を得た．周怡はまた全国に12しか確認されていない平次郎臓図を入手している．

7代黒川周益は文化6年に家督を継ぎ，4人扶持御手医師並の待遇を受け，在勤35年で御匙医師となり，天保14年に亡くなった．

8代黒川周益は天保15年に家督を継ぎ，15人扶持御手医師並の待遇を受け，明治3年家禄18石になり，明治7年4月に依願隠居している．

9代黒川文哲は20歳のとき江戸「軍防官病院」で外科を学び，英国人医師ウイリスに師事したが22歳のとき黒川邸が全焼し，病院の復興のため郷里に戻った．24歳のとき熊本古城医学校に入学し，オランダ医マンスフェルトに学んだが，上級生に北里柴三郎がいた．29歳のとき西南戦争で住居地竹田は激戦地となったが，政府軍に属して負傷者の治療を行った．39歳行政に先駆けて「私立衛生談話会」を組織し，伝染病の予防に取り組んだ．49歳のとき県会議員になり，大分県立図書館の建設を提案して実現，明治7年4月に竹田市立図書館の前身竹田文庫を設立した．

10代黒川健士は京都帝国大学医学部を卒業し，大阪で病院を開設した．明治45年京都帝国大学長の推薦で樺太医療の整備にあたる．帰郷後大正4年に地方では稀有な総合病院である私立竹田病院を設立した．

11代黒川桂郎は九大医学部を卒業し，昭和34年竹田市に帰り，黒川産婦人科医院を開業する．昭和57年と平成2年に水害に遭った．兄の長男黒川正身は慶大学医学部卒で国立予防衛生研究所でワクチンの研究をした．弟の4男英次も九大医学部を卒業し，外科医になり昭和37年に竹田で開業した．

12代黒川達郎は近畿大学医学部の一期生として卒業した．産婦人科医．漢方医．漢方の勉強を通して医史学に興味を持ち，漢方の先哲について各種雑誌に論文を投稿している．

今回，広島で日本医史学会が行われるの機に，黒川家の歴史をまとめ報告したいと考えている．